

科 学

ひょうたんから駒 大学発化粧品続々

新薬開発目指す研究から誕生

新薬開発を目指す大学の研究から、続々と化粧品が生まれている。本来の研究目的ではない成果だが、研究者たちは「化粧品メーカーとは異なる視点、関心があったからこそ開発できた」と打ち明ける。「ひょうたんから駒」ともいえる大学発化粧品を探った。

【永山悦子、写真も】

されるなど、「皮膚の水分や張りを保つ働きがありそうだ」と分かったという。ボランティアの協力で実験を重ね、しわの改善や皮膚の水分量の増加が確認され、昨年夏に「雅Gracie」という商品名で化粧水などが発売された。

化粧品は薬事法で「人体への作用が緩和なもの」と定められ、具体的な効果や効能をうたうことが認められていない。このため、多くの研究者にとって化粧品研究は魅力が乏しかったようだ。だが、室伏さんは「薬でも化粧品でも、研究成果は人の役に立つためである。日々使うものだからこそ、科学的な根拠が必要」と話す。

「当初はがん治療薬の開発に役立てたかった」

お茶の水女子大の室伏きみ子教授(細胞生物学)は1985年、細菌から未知の脂質を発見した。この物質には細胞を正しく分化させる働きがあり、ラットの実験で、がんが広がったり転移するのを抑える働きを持つことも分かった。

◆学会発表で注目浴びる

室伏さんが学会で発表したところ、油脂メーカーの

研究者から問い合わせが来た。皮膚の保湿成分とされるヒアルロン酸などの調節に役立つ可能性があり、関心を持ったという。

本来の研究の合間に、皮膚への影響を分析する研究が始まった。この脂質をヒトの皮膚の線維芽細胞に加えると、ヒアルロン酸を合成する酵素や、水が細胞膜を通る際に必要なたんぱく質が増えることが明らかになった。また、細胞の形を維持する線維の発達を確認



「化粧品だけではなく、新薬開発にも研究を生かしていきたい」と話す室伏きみ子・お茶の水女子大教授(右)＝東京都文京区の同大で